

Emanuel Goldberger 著／実地医家のための会誌

病人と病氣 ——医師たちは考える——

慈恵医大教授・内科 阿 部 正 和

内科医が患者に一枚の処方箋を渡すとき、あるいはまた、外科医が手術の適応を決定するとき、はたして心の底から患者の真の幸福を願って行なっているだろうか。もちろん、そうすべきであり、また、そうしなければならない。

新しい薬が次から次へと、あたかも洪水のはんらんのように世の中に出てくる今の時代に、とくにこの問題は、もう一度あらためて反省すべきであろう。

また、とかく華やかで技術的なことのみが、マスコミを通じて世の中に伝えられ、それが医学の先端的なことであり、偉大なことであるかのように錯覚におちいりがちなこの時代に、とくに考えなおしてみるべき問題であると思う。

このたび、実地医家の会の有力なメンバーである春日豊和・日高嘆二の両博士の手によって、Goldbergerの“*How physicians think*”が翻訳され上梓されたことは、大変タイムリーであったと考える。一人でも多くのドクターに、とくに大病院の若いドクター、大学病院の研究者的

立場にある方々に読んで頂くことを切望する次第である。

本書は全巻を通じて、患者をいかに診るべきか、いかに治療すべきかについての Goldberger の医の哲学が述べられている。

“病氣という実体は存在しない。存在するのは病人だけである”。“病氣ではなく、病氣に悩む病人を治療すべきである”。“病人の行動の変化をつかみとれ”，という彼の主張が貫かれている。本書の一字一句が、私の胸につきささってくるような思いで本書を通読したのである。

しかも、著者は本書の前後で“医師は幸福である。医師は奉仕し、それによって、もし望むならば、多くの人たちと真の関係をもつことができる。われわれの文明社会においては多くの人は孤立し、さみしく、また信仰をもたない。しかし、一人の命を助けることは、世界に奉仕することである”という信念で常に仕事をするのできる医師には、孤独もさみしさも訪れないであろう、と結んでいる。何と立派な言葉であろう。

わが国の多くのドクターは、病人の社会的側面を理解しようという努力に欠けており、計量診断という言葉そのものに魅せられている今日この頃である。また、宗教的なバックボーンという点でも欧米諸国のドクターとは異なる面もある。それでもなお、Goldberger の言わんとしていることは、私の心を痛むまでにゆさぶるのである。

コンピューターの時代を迎えようとしている今の時代は、医師と病人との人間的なつながりを、ますます強固にしなければならない時代でもある。このような時に、本書が一人でも多くのわが国のドクターに読まれ、“医師はいかに考えるべきか”を再反省してもらいたいのである。

最後に、実地医家の会の方々、日常診療の多忙な中であって、実地診療に本当に役に立つ書を出版されたり、本書のように格調の高い、医のモラルの書を翻訳されたりする日頃の御努力に対して、心から敬意を表する次第である。

A 5 判 頁224 図2 ㊦2,000 ㊦90

医学書院刊